

環境省モニタリング1000森林サイトを利用した樹木多様性の理解

小野田雄介（九大・理・生物）

1. 概要

植物の生理機能、形態、フェノロジーなど様々な形質は、温度や降水量などの物理環境や他の生物との相互作用の中で多様に進化してきた。形質の違いを定量的且つ体系的に研究することは、植物の多様性創出機構や生態系機能を理解することに繋がる。

日本では5,500種以上の維管束植物が記録され、そのうち約1,760種が樹木種である。1つの森林でも多くの種が共存する一方で、温度勾配や攪乱の歴史によって、森林の種組成は大きく異なる。日本では、長年に渡り研究されている森林調査プロットが多くあり、それらを統合して、広域的な理解を得ようという試みが進んでいる（環境省のモニタリング1000プロジェクトなど）。ちなみに、九大演習林は、粕屋、椎葉、足寄拓北、足寄美盛、足寄花輪の5つのモニタリング1000サイトを管理している。

全国に広がるおよそ55のモニタリング1000の森林サイトに出現する種は総計363種であり、この全ての種について形質情報をまとめるという意欲的（無謀？）な試みを進めている。データ収集はまず既存データの統合から始めた。多くの研究協力者のもと、今のところ363種のうちおよそ50%程度について、なんらかしらの形質データが集まっている。ただし文献レビューによるデータだけでは、十分なデータが得られないので、野外調査も少しずつ行なっている。昨年は粕屋演習林に一度訪問させていただき、20種ほどのサンプルを得た。ただし、サンプル量は十分でなく、十分に解析できるレベルではない。今年度は、粕屋、足寄を含め、複数のサイトに調査に行く予定であり、データの充実を図る。

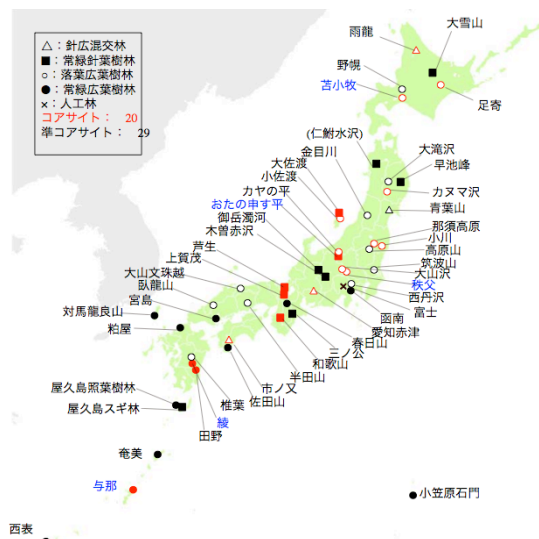


図1 モニタリング1000森林サイト
<http://fox243.hucc.hokudai.ac.jp/moni1000/>より
転載。